平成六年九月一日発行（毎月1日発行）三七二号　発行／黒埼町役場　〒九五〇―一一　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三―一　電話／〇二五七―三七七―三一〇一　編集／企画商工課（担当・広報統計係）　印刷／小野塚印刷㈱　経費一部四二円

人 112

ボーイスカウトの祭典日本ジャンボリーに参加

大野 小野祐介くん、戸枝利晃くん

"日本ジャンボリー"は四年毎に開催する、ボーイスカウト運動最大の野営大会で、第十一回大会が八月三日から七日まで大分県の久住高原で開催された。この大会は参加資格等が厳しいが、本町からは小野祐介くん、戸枝利晃くん、そしてもう一人が参加した。

ジャンボリーの参加資格の一つとして"二級"になる事が条件だが、小野くんは直前になってとる事ができた。だから喜びも大きく「参加できて嬉しかった」と言う。

会場は久住山の南裾野に広がる草原地帯で「阿蘇くじゅう国立公園」内の高原地域。「土が柔らかくてテントが建てやすかった（戸枝くん）」「最後の日は雨だったけど、他の日は快晴で暑かった（小野くん）」気温が三十八度に達した日もあったそうだ。

この日本ジャンボリー、国際野営大会という別名もあってか、外国の派遣団も数百人参加し、総勢では三万人を越える。各県の派遣団も開会式の前に会場入りし、テントの設営や準備などを行うが、二人の参加した新潟の第三派遣隊も二日前から野営し、ごみ拾いなどの環境整備を終えて帰郷したのが八月九日。長期のキャンプとなり、キツイ面もあったが、その分楽しい事も多かった。「九日間は長かったです。でも、最後の日に熊本市内を見学できて良かったし、夜の星がきれいでした（戸枝くん）」「山が良く見えてきれいだったし、夜は流れ星を見ることができました。参加して良かったと思います（小野くん）」この他、自然発光する木を見たりと、このジャンボリーで小野くんと戸枝くんは様々な体験をしてきた。

写真／上　小野祐介くん（右）と戸枝利晃くん。ボーイスカウトの級は、見習から始まり、初級、2級、1級、菊章とあり、二人は2級。下　大分県久住高原で行われた「第11回日本ジャンボリー」開会式。3万人以上の人が集まった。

日本ジャンボリーは、参加者相互の親睦を図り、友情を深めることを一つの目的としているが、二人とも他県のボーイスカウトたちと食事などを通じて交流を深め、「友達が出来ました」と二人とも言う。

スカウト活動を通じて逞しくなっていく小野くんを、お母さんは「子供がキャンプに行く度に、日焼けして精神的にも逞しくなって帰ってくるのを、私自身わくわくしながら待っているんです。また、カブスカウトなどの小さい子供たちの面倒を見たりするので、相手に対する思いやりを持つようになってきましたね」と目を細めて話してくれた。

最後に、高校生になってもスカウト活動は続けて行きますか、の問いに二人とも「続けて行きます」と、目を輝かせて答えてくれた。この夏の体験、二人にとっては、きっと一生の思い出となる事だろう。

ほんの一冊

「海を見たことがなかった少年」

ル・クレジオ著　集英社
豊崎光一・佐藤領時　訳

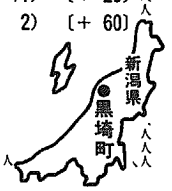
現代フランスの作家ル・クレジオによる短篇集。子供の眼差しで世界を見つめ、凛とした美しさ・透明感のある八つの作品からなる。難解なイメージのある著者の作品の中では分かりやすい。冒頭の一篇の「モンド」では南仏の海辺の町を舞台に、少年モンドの目を通してみた自然の美しさと人々が描かれる。『おとな』から見ればただの浮浪児であるが、モンドが内に持つ感受性の豊かさがかって『こども』であった人々の何かを目覚めさせる……。クーラーの効いた部屋で多くの物に囲まれた生活が虚ろに感じられる、そんな一冊です。　（中山佳奈恵）

〈人の動き〉

7月末日現在	（前月比）	前年同日比
人口	24,027（－20）	〔＋52〕
男	11,781（－9）	〔＋32〕
女	12,246（－11）	〔＋20〕
世帯	6,716（＋2）	〔＋60〕

7月1日～末日

出生　18　転入　43
婚姻　17　転出　67
死亡　14



記録的な猛暑となった今年の夏。おまけに雨が降らないために大河信濃川が逆流し、ときめき橋付近では塩分の濃度が上がったとニュースで伝えていました。「暦のうえでは立秋も過ぎたというのに、早く涼しくなってくれないかな」と汗を拭き拭き原稿を書いている編集子でした。▼黒埼まつりも今年で数えること十回となりました。今年からおまつり広場の会場や花火の観覧場所などが、新潟ふるさと村周辺となりましたが、多くの人達で賑っていました。また、マンガ展も大変好評でしたが、こちらの模様や講演会などは来月号で紹介したいと思います。

◎さて、来月号は、このほか敬老会などをお知らせする予定です。